

大学の図書館

第40巻第9号 (No.574)

2021 9



目次

良き問いを立てること 和知 剛 ...135

特集：専門分野の図書館員たち

京都大学人文科学研究所図書室：共同研究と蔵書、展望、一職員の課題 ... 山崎 千恵 ...136

教育系大学の図書館 高井 力 ...139

とある部局図書室のお話一名古屋大学生命農学図書室 田中 幸恵 ...142

分野をまたぐ図書館員とシステムティックレビュー執筆支援 河野由香里 144

大学図書館員によるサブジェクトサービスの可能性 佐藤 知生 147

良き問いを立てること

和知 剛

ギュスターヴ・フローベールは『紋切型辞典』に「問い：問いを発することは、すなわちそれを解決するに等しい」と記した。『紋切型辞典』は皮肉と諧謔に満ち溢れた書物だが、時々このような、真面目に正鵠を突く言葉が現れるので油断ならない書物でもある。わたしは例年、年度当初の新入生向けの講義で「ノートのとおり方」や「レポート・論文の作成法」について触れることにしているが、そこで紹介する先人の言葉のひとつとして、このフローベールの言葉を紹介するよう務めている。レポートや論文を執筆するための「拠点」として、まず執筆者が課題として何を解決しようとしているのか、解決すべき問題点に焦点を合わせることができれば、そこから回答への足がかりがつかめるというものである。

フローベールの言葉は案外、応用の効くものだとわたしは考えている。例えばレファレンスにおいても、利用者が何を探しているの

か、適切な問いを立て焦点を絞り込む（問題点を整理する）ことができれば、ある程度容易に回答にたどり着くことが可能になると思う。時々、利用者も善意で課題を自ら整理し、レファレンスの用に役立てようと課題を別の言葉に置き換えて調査を依頼してくることがある。これを改めて解きほぐして問いを立て直し、課題を整理することによって参照すべきレファレンスツールが何であるかを探し出し、それを確認するためにも、図書館・利用者の意思の疎通を図り、適切な問いを立てることが望ましい。そして適切なレファレンスツールを検索・参照・確認できることは、専門職として必要だし、大切な役割のひとつである。

ときに新型コロナウイルス禍はまだまだ収束する気配を見せない。図書館として必要とされる情報を入手し、利用者に提供するためにも、適切な「問いを発する」ことがわたしたちに求められていると思う、今日このごろである。

(わち・つよし/郡山女子大学短期大学部)

特集：専門分野の図書館員たち

昨今、オープンデータ・オープンサイエンスの推進が大学図書館の重要なミッションの一つになっていますが、私たちが、このような従来よりも踏み込んだ研究支援を行うためには、それぞれの学問分野の特性を知ることが重要になってきます。今回の特集では、文系・理系様々な4つの図書館で勤務されている方に、それぞれの分野の特徴や研究者の身近で業務をさせて見えてくること、そしてそれに基づいた図書館のサービスについて書いていただきました。

また今回の記事の中でも言及されていますが、多くの総合大学の図書館の場合、数年ごとの定期的な人事異動があるため、せっかくその分野の研究者と信頼関係を築けても、全く異なる分野の図書館に配置換えされてしまう、という悩ましい問題があります。この永遠の課題ともいえる悩みについて、諸外国の例を参照しながら、解決を模索する記事も書いていただきました。今回の特集が、より専門分野のニーズにフィットしたサービスを、日本の大学図書館界でも提供していけるようにするための一つのきっかけになれば幸いです。

(編集担当：京都地域グループ)

京都大学人文科学研究所図書室： 共同研究と蔵書、展望、一職員 の課題

山崎 千恵

3つの「書庫」

京都大学人文科学研究所は、京都大学吉田キャンパス本部構内の北に位置する東西に長いL字型建物の複合施設の一角にあり、所内ではこのL字型建物にある研究所が「本館」と呼ばれています¹⁾。この本館内には、東西に約68m、南北に約15m、地上1Fから3Fを占める細長い図書室があります。研究所の全蔵書は約66万冊ですが、その半数の30万冊をこの本館書庫に収容しています。残りの蔵書は、この研究所の成り立ちゆえに、漢籍をはじめとする中国語の資料です。中国語資料は研究所内の二つの附属センターである東アジア人文情報学研究センターおよび附属現代中国研究センターに配置しています。

「本館」とよばれる細長い研究所に対して、

東アジア人文情報学研究センターは、現在「分館」と呼ばれます。白川の地に東畑健三氏が設計したスパニッシュ・ロマネスク様式の建物に居を構える同センターは、1930年設立当初、書庫の蔵書収容冊数が10万冊と算定されていたとの記録がありますが²⁾、今も書庫以外の共同研究室や収蔵庫なども活用しながら、漢籍30万冊以上を収容しています³⁾。

また、通称「現中研」とよばれる現代中国研究センターは、人間文化研究機構のネットワーク型研究推進事業において現代中国についての共同研究推進のために2007年に設置されました。現中研は本館書庫の上階に位置し、「現代中国情報資料集積基地」と名付けられた書庫や本館図書室書庫内に、現代の中国地方新聞やそのマイクロ資料、地方誌、地図などの資料を収容しています⁴⁾。

成り立ち

現在二つの附属センターを抱える京大人文科学研究所の成立は外務省の管轄下、1929

年に東京と京都とに創立された東方文化学院にさかのぼります。その東方文化学院京都研究所から1938年に独立した「東方文化研究所」、京都大学の附属研究所として1939年に設立された「旧日文学研究所」、1946年にドイツ文化研究所を改組してできたイギリス・アメリカ・ドイツ等の文化の研究に従事する「西洋文化研究所」、この3研究所が1949年に統合することで、京都大学人文科学研究所（人文研）が創設されました。

共同研究

人文研では所員の一人が班長となって研究班を組織し、所員全員が一つ以上の共同研究班への参加をするという共同研究班の制度をとって、共同研究を行ってきました。これら共同研究（班）の産物は、図書室の蔵書構成にも表れています。人文研創設の共同研究班は日本部の柏祐賢、東方部の水野清一・平岡武夫・安部健夫・貝塚茂樹等々、西洋部の桑原武夫の大きく3つの部にわかれていました。現在は東方部と人文部の研究部の二つ部があり、その部のそれぞれの所員による選書と、共同研究のための資料収集自体が、図書室の蔵書の柱です。東方部の龍門や雲崗、イラン・アフガニスタン・パキスタン調査などの文物研究、甲骨文、金文、敦煌写本の文物から文献への研究、そして会読、校定、校注などの文献研究がもたらした調査報告書、索引・目録類は共同研究の成果物であり、人文研制作の学術資料でもあります。旧日本部の伝統産業の調査や農村漁村の実態調査、旧西洋部の桑原武夫の文学理論に関する文献、今西錦司のアフリカ調査や梅棹忠夫のヨーロッパ学術調査などから連なる文化人類学に関する文献なども、本館の蔵書を支えています。また、2010年に研究所が全国共同利用・共同研究拠点となってから後も、「学際的研究学界セクションリズムの打破」、「原典の会読」、「現地調査」の三つの共同研究方法論の

伝統と継承の下、共同研究を続けています⁵⁾。

特徴的な資料

人文研の年間の図書受入冊数は、ここ10年間の平均は年間約7000冊ですが、年間の受入冊数の5割は寄贈資料です。共同研究のための資料は、所員が収集した資料をのちに寄贈で受け入れることも多く、人文研の蔵書構築にはこうした所員の寄贈や、関係所員の旧蔵書の購入が欠かせません。私の勤務する本館図書室の文庫にも、大阪朝日新聞従軍記者として派遣先の戦線で、軍に無残に踏みにじられる中国古籍を目のあたりにし、借金してまで自力で書籍を保護した村本英秀の寄贈した村本文庫⁶⁾、中江兆民の息子である中国近代政治思想史を研究した中江甚吉の蔵書である中江文庫⁷⁾、印度哲学の泰斗で元東方文化研究所長松本文三郎の蔵書である松本文庫⁸⁾、満蒙関係資料を中心とした京都大学名誉教授内藤虎次郎旧蔵書の内藤文庫⁹⁾、朝鮮近代経済史の研究者安秉珪氏の研究ノート、撮影資料も含む安文庫^{10), 11)} など、代々の所員や所員にゆかりのある方の文庫が並びます。

ここ数年内に受入をしてきたコレクションにも、桑原武夫の指揮した『百科全書の研究』に参加後にディドロを中心にフランス18世紀の思想・文化の研究を牽引した、元京都国立博物館長で京都大名誉教授の中川久定の旧蔵書中川文庫¹²⁾、「みやこの学術資源研究・活用プロジェクト」によって寄贈受入をした山本明氏・都村健氏旧蔵映画・演劇資料¹³⁾ や、文化大革命時期に発行された紅衛兵組織・造反組織の収集した鱗澤彰夫氏寄贈資料¹⁴⁾ があり、それぞれ図書・雑誌の資料整理が完了しつつあります。さらに、文庫化はされていないものの戦前戦後の科学史・思想史研究に供する文献、社会運動に関する研究資料も、図書室への問い合わせの多い、需要が高い当図書室の特徴的な資料です。

漢籍

そして、所内で国内屈指の資料と言え、成立時から網羅的に収集し、整理を続けている漢籍です。村本文庫、松本文庫ならびに内藤文庫などの一部の漢籍や、そのうちの貴重資料は本館の貴重書庫に保管されていますが、それ以外は分館である東アジア人文情報学研究センターに所蔵されています。分館自体が、漢籍資料の貴重書庫でもあります。さらに、資料を収集するだけでなく、分館が作成・運営し続ける全国漢籍データベース¹⁵⁾は、オンラインで日本全国の漢籍の検索を可能にしました。所内の漢籍は四部分類を付与し、この全国漢籍データベースに登録されています。さらに、一部ではありますがオンラインサイト「東方学デジタル図書館」では、デジタル化された研究所所蔵の漢籍を、世界中から利用することが可能です¹⁶⁾。

展望と課題

分館については旧来から、こうして共同研究の一環としても、データベースの作成や収集資料、所蔵典籍のオンライン化を進めてきましたが、こうしたオンライン化された学術資料の継続と維持、発展は所内でも中心的な課題となっています。これらの学術資料のデジタル化、オンライン公開を、研究所の課題として捉え、次の展開として、IIIF化や、まだオンラインでは公開ができていない研究所資料のデータベース化を目指す計画が進行中です。前述した共同研究やプロジェクトによって収集される資料群には、図書や雑誌という従来の図書館で扱ってきた資料以外のアーカイブ資料が多々含まれますが、そういった資料の整理・保存・そして活用・公開についても、所員から図書室の職員に問い合わせが寄せられるようになっていきます。昨今、所員から図書室に期待される業務の一つが、資料のオンライン公開に関わる権利処理です。学内の図書系の整理担当・研究公開（リ

ポジトリ含む）担当、博物館学芸員、法務担当などの協力を仰ぎながら、所員の要望に応えることが、図書室の主要な業務になりつつあります。また、先にも述べた各種文庫やコレクションの収集資料については、本稿の注にも示した通り、その都度共同研究班の手で、研究報告書や目録が丁寧に作成されてきました。ただし、いまだオンライン化は道半ばです。こうした業績を世界に公開し、成果物のさらにもう一歩先の活用を進めるためにも、所内刊行物のオンライン公開へのルールを敷く、それが図書室に勤務する一職員の課題のひとつです。

- 1) 京都大学人文科学研究所
<https://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/>
(accessed on 2021-07-31)
- 2) 京都大学人文科学研究所．人文科学研究所50年，1979
- 3) 東アジア人文情報学研究センター
<http://www.kita.zinbun.kyoto-u.ac.jp/>
(accessed on 2021-07-31)
- 4) 現代中国研究センター
<https://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~rcmcc/index.htm>
(accessed on 2021-07-31)
- 5) 人文科学研究所『自己点検評価報告』2020年度
<https://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/self-checkevaluationreport.html>
(accessed on 2021-07-31)
- 6) 京都大学人文科学研究所村本文庫目録，1949
- 7) 京都大学人文科学研究所図書室．中江文庫目録．新着図書月報，1964，第11号
- 8) 京都大学人文科学研究所．松本文庫目録
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2985566>
(accessed on 2021-07-31)
- 9) 京都大学人文科学研究所．内藤文庫目録

- 10) 京都大学人文科学研究所. 安乗治文庫目録
- 11) 飯沼二郎. 安乗治文庫について. 静脩, 1987, vol.24, no.1-2, p6-8,
<https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/36980/1/s241202.pdf>
 (accessed on 2021-07-31)
- 12) 京都大学人文科学研究所. 中川文庫貴重書目録: 京都大学人文科学研究所所蔵, 2016
- 13) 特集 山本明コレクション. 人文学報, 2021, 第116号 (京都大学人文科学研究所紀要. 第192冊)
<https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/262787>
 (accessed on 2021-07-31)
- 14) 京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター編. 鱒澤彰夫氏寄贈資料目録: 京都大学人文科学研究所所蔵, 2019
- 15) 全国漢籍データベース
<http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/kanseki>
 (accessed on 2021-07-31)
- 16) 東方学デジタル図書館
<http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/toho/html/top.html>
 (accessed on 2021-07-31)

(やまざき・ちえ/

京都大学人文科学研究所図書室)

教育系大学の図書館

高井 力

1994年に東京学芸大学に就職し、一度は、他の大学に移った時もあるが、20年以上は教育系大学に勤めたことになる。その間、電子図書館的なことや増改築などを経験するこ

ととなった。本稿では、まず、本学の特徴と教育系資料について教科書を中心に説明し、次に数々の変化の中で、教育系大学の図書館として考え、行ってきたことについて書くことにしたい。

1. 東京学芸大学

東京学芸大学は教員養成系の単科大学であり、教育支援職を育成する課程もある。教育は広い分野に関わることもあり、人文社会科学や自然科学、芸術スポーツ科学など多岐にわたる分野を扱う。

教員養成系のため、多くの学生が主に3年次に教育実習に行くのも特徴でありそのサポートも必要である。現職教員のサポートも目的の一つとなっている。2019年には大学院を改組し教職大学院の枠を大きくした。本学の研究に基づく実践的教育が行われる附属学校・園を持つのも特徴である。

2. 資料について

本学では幅広い分野の資料が必要になるとともに、教育に関する資料を重点的に収集している。蔵書の3割が教育関係の図書と推計され、配架する際もNDCで配架しつつも、370番台の教育が目立つ位置に来るようにするなどの工夫をしている。

その中で一番コレクションとして重要なのは、小中学校・高等学校で使われる教科書だと思われる。

3. 教科書

教科書は教育実習等で授業に行く際の指導案の作成の参考にされるなど、教育養成系の大学では重要な資料である。学習指導要領に基づいて作られている。

3.1 教科書検定¹⁾

教科書には、それが使われる学校の種別(小学校・中学校等)や教科の他に、定期的に改

定されるという特性がある。今年は小学校、次の年は中学校という具合に改定され、そのサイクルはおおむね4年である。その際に文部科学省の「検定」を受ける。教科書番号が振られ、同定のキーとなっており、その構成は、出版者番号+その略称+教科記号+番号である。

3.2 教科書標準分類

教科書を整理、配架する際も、特殊な分類を利用している（/は段の区切り）。

T1A7 / 1S9 / 2

1段目が、教科書であること（T）、使用されるのが日本であること（1）小学校（A7）で利用されること、2段目は教科が国語（1）であること、検定年が2009年（S9）であること、3段目は出版者の番号（教科書番号と共通）を表す。これにより教科書を、教科ごと、検定年ごと、出版社ごとなどに配架できる。

この分類は国立教育系大学図書館協議会の小委員会で1979年に作成され²⁾、新しい教科に対応するように改定し、使い続けられている。

3.3 教科書の目録

目録規則の適用が難しく、私の就職当時は目録システムには入れず、業務システムから紙のリストを出力していた。平成13年に新電子図書館システムを導入するにあたり、目録とは別のデータベースとして整備され始めた。NIIで「教科書に関する取扱い及び解説」が整備され、その案が『NACSIS-CAT/ILL ニュースレター』³⁾に掲載されたのが、平成16年6月である。その後、NACSIS-CATへ入力されるようになっていった。教科書番号や検定年の記載、書誌単位について定めている。CAT2020の際には、書誌作成単位の見

直しなどを行った。

本学OPACでは教科書に限定したり、教科書番号での検索を可能にしている。教科書分類の前方一致検索で、学校種別・教科を絞った検索もできる。

3.4 デジタル教科書への対応

まだ、紙の教科書が主で内容も紙の教科書と同じ内容であるが、平成31年4月から関係法令が施行され、必要に応じてデジタル教科書を併用できることとなった。授業使用前提で、図書館で利用できるライセンスとなっていないことが多い。

昨年度、ICTセンター教員の努力により、本学で4社の小学校用デジタル教科書提供が可能になった。教科も1～3教科で学年が限られるが、教員になる前にデジタル教科書に触れる機会は重要である。その中で、図書館で提供できたのは一社一教科のみで固定端末での利用に限られているが、少しずつでも増やせていけたらと思う。

ライセンス的に、アーカイブが難しいのも図書館として問題である。

4. 教育実践情報とデータベース化と

平成13年に教育情報ナビゲーションシステムが導入された際も、教育系大学として何をデータベース化・提供して行くか考えられた。授業の記録、報告、指導案などを「教育実践資料」と呼び、授業を組み立てる際に参考になる資料ということで収集しようということで、その一つとしてインターネット上の教育情報が選ばれ、「パスファインダ」として、そのディレクトリの整備などをした。

また、教育総合データベースとして、教科書の目録情報や附属学校・園の紀要を含めた目次情報の入力・提供が行われた。ダブリンコアの枠組みでメタデータを作成し、学校種別、教科などの主題情報を入れ、それらから検索する機能も備えていた。

5. 教育総合DBからリポジトリへ

本学でも、平成18年に教育総合DBを引継ぐ形で、リポジトリを立ち上げた。教育実践情報の収集をと言うことで、本学の研究に基づく実践的教育が行われ、その報告等が掲載される附属学校・園の紀要に力を入れるなどした。

教育主題からの検索についても継承したいと考え、教育系サブジェクトリポジトリを立ち上げた（平成21年）。国立教育系大学図書館協議会と文教大学の協力を得て、教育関係論文等のSubjectに学校種別や教科の情報を入れる事業を行った（例）Subjectに「SSUB:数学」などと入れる。「SSUB:」の部分が、教科であることを示す。ハーベスト機能により、参加した機関すべての教育関連情報を一括検索するサイトも用意した。

残念ながら、検索サイトについては本学のリポジトリがJAIRO Cloudに移行するにあたり終了した。しかし、教育主題情報を入れる作業は継続しており、その活用方法については今後も検討したい。

6. 改築とラーニングcommons

本学は耐震改修を行い、平成27年にリニューアルオープンしている。その際にラーニングcommonsの整備を行った。その際にもやはり実習等の支援を考えた。

模擬授業への対応のため、黒板サイズの大型ホワイトボードや、教室サイズの机や椅子等を準備したり、ラーニングcommons内に教科書や実習用図書を配置した。学校図書館を模して、絵本・児童書も配架した。commons内で教科書を広げ、授業の計画を練っている学生をよく見かける。

7. 増築とGIGAスクール構想

さらに令和2年から令和3年にかけて、教職大学院と合築で、増築が行われた。工事は今年5月末に完成し、その後、什器の搬入や

書架の移動をしながら、準備のできたところから順次オープンし、7月時点では、地下書庫部分は準備中であるが、地上1～2階のラーニングcommonsを含む部分はオープンしている。

増築はコロナ禍で進められた。そのため、当初の計画には無かったオンライン授業で利用可能な個人用ブース導入や、間隔が十分取れるような什器配置の再検討をした。

無線LAN強化や電源コンセントの拡充も行われ、情報機器を利用した活動のためのインフォメーションcommonsも設けた。電子教科書の利用環境も改善できないか検討が続けている。

コロナ禍で教育現場では、小中学校の生徒一人に一台のPCと高速ネットワークを整備するGIGAスクール構想(Global and Innovation Gateway for All)が加速している。その動きの中で、今後の教員にはICT機器を活用した授業を組み立てる技術が求められる。今後、教員になろうという学生にどのような環境を整えられるか、考えて行かなければならない。

(参考)

1) 教科書の検定・採択については文部科学省のページを参照。

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoukasho/main3_a2.htm
(access_date: 2021/07/21)

2) 全国国立教育系大学附属図書館協議会教科書標準分類小委員会.『教科書標準分類法』. 大学図書館研究. XIV, p.62-78 (1979.4)

3) 「教科書に関する取扱い及び解説(案)』. 『NACSIS-CAT/ILL ニュースレター』. 14号 (2004.6.23)

(たかい・ちから／

東京学芸大学附属図書館)

とある部局図書室のお話—名古屋 大学生命農学図書室

田中 幸恵

名古屋大学附属図書館は、中央図書館、医学部分館、そして各学部・学科・研究所・センター等に置かれた20以上の部局図書室から構成されています。各部局図書室は各部局事務部図書係として業務にあたってきましたが、2017年10月の附属図書館事務部組織再編により、常勤職員は「附属図書館東山地区図書課」に所属が一元化されました。しかし、これはあくまでバーチャルな組織名称で、予算や利用条件等、実際のところは引き続き各部局の管理の下で図書室運営を行っています。本稿でご紹介させていただく名古屋大学附属図書館生命農学図書室（以下、当室）は、この部局図書室の1つです。今回の特集のテーマである「専門図書館」と聞いてイメージされるものとは少し毛色が異なるかもしれませんが、理系の学生・教職員の教育研究支援に特化した図書館とはどんなものか、知っていただく一助になりましたら幸いです。

1. 名古屋大学農学部・大学院生命農学研究 科の概要^{1), 2)}

名古屋大学（以下、本学）の農学部は、1951年に愛知県安城市に設置されました。1955年に大学院農学研究科が設置されたのち、1966年に現在地である名古屋市千種区に位置する名古屋大学東山キャンパスに移転しています。1997年には農学研究科が大学院生命農学研究科に改称されたほか、何度かの改組を経て、3学科4専攻体制となって現在に至ります。附置センターとして、フィールド科学教育研究センター（東郷フィールド（旧附属農場）と稲武・設楽フィールド（旧附属演習林））と附属鳥類バイオサイエンス研究センターがあり、関連する学内共同教育研究施設として、生物機能開発利用研究セン

ターと農学国際教育研究センターがあります。

2. 名古屋大学附属図書館生命農学図書室の 概要^{1), 2)}

当室は、本学に農学部が設置された翌年に図書分室として旧安城キャンパス内に設置されたことから始まります。1960年には農学部事務部に図書掛が置かれ、農学部の移転と同じタイミングで東山キャンパスへと移転しました。当室は、現在農学部管理棟の2階に位置していますが、農学部らしく(?)、建物の周りは緑に囲まれており、四季折々に様々な木々の姿を窓越しに見ることができ、大変穏やかな環境の図書室です。

主な奉仕対象は農学部・生命農学研究科の構成員（学生1,704名、教職員258名（2021年5月1日現在）で、蔵書冊数は113,432冊です（2021年3月31日現在）。

3. 蔵書構成の特徴

当室の蔵書の主な分野は生命科学分野・農学分野の図書で、初学者向けの入門書から高度な専門書まで、網羅的に収集しています。予算との兼ね合いで優先順位は下がるものの、汎用的なアカデミックスキルに関する図書も、学内重複状況をあまり気にせず購入しています。あえてそうしている理由は、農学部の立地です。農学部から中央図書館まではなかなかの距離があり、徒歩で15分ほどかかります。そのため、本学の他の部局図書室のように汎用性の高い図書について中央図書館の蔵書を頼みにしにくく、なるべく当室で必要な情報収集が完結するように考慮しています。最近では、1・2年次の全学共通教育課程においてデータサイエンス教育に力を入れていく方針が示されていることもあり、RやPythonなどのプログラミング言語や統計に関する図書も増えてきました。

利用者に対する蔵書PRとして、図書室の

入口を入ってすぐ横に新着図書展示コーナーを常時設け、POPをつけて利用者の目につきやすいようにしています。また、研究科所属教員の著書のうち、図書室にご寄贈いただいた分は「教員著作コーナー」として別置しています（すべて貸出可能です）。さらに、学生の福利厚生を目的として、Tokai Walker やオレンジページなどの一般雑誌も置いています。学生だけでなく教職員の方も、勉強や研究の合間にこういった雑誌を読みに来られ、のんびりと過ごされている姿もよくお見かけします。

4. 利用者教育の取り組み

当室では、従前から独自のガイダンス・講習会などを充実させるべく努力してきました。その中心は、毎年春に開催している「文献検索ガイダンス」です。

「文献検索ガイダンス」は、新しく研究室に配属になった4年生や他大学から進学された修士課程1年生の方を主な対象として、本学における文献検索の手順や各種データベースの使い方の紹介を講義形式で行うものです。具体的には、まず受講者自身の研究テーマの先行研究についてWeb of Scienceで検索してもらっています。その後、見つかった先行研究論文が載っている雑誌が学内で利用できるか確かめる方法を紹介し、最後に、集めた論文のデータをEndNote Webに取り込んで参考文献リストを作成する流れを紹介します。なるべく実習時間を多くとること、図書室職員が机間巡回を行って受講者に積極的に声をかけるなど、手厚いフォロー体制を敷いて、例年ご好評いただいております。

しかし、コロナ禍の影響で2020年度は開催中止、2021年度は、Microsoft Teamsを用いてオンラインライブ配信形式での開催に変更せざるをえなくなりました。画面共有機能でPowerPointのスライドを共有して説明を行い、対面時と変わらず実習時間を設けま

した。実習中の質問は、ブレイクアウトルーム機能を使って職員が個別に対応しました。オンラインの場合、今までのようなきめ細かなフォローができない、という点が開催側としての最大のマイナスでしたが、受講生側からはオンライン開催を歓迎するご意見もありました。仮にコロナ禍が落ち着いたときに、安易に対面に戻していいものか、内容の精査も含めて来年度に向けて検討を進めているところです。

5. 利用者との交流から身につけていく専門知識

筆者が当室に配属されて感じた一番の特徴は、利用者との距離の近さでした。今まで当室で勤務してこられた方の努力はもちろん、先述の通り中央図書館からの距離が遠いことがプラスになり、農学部・生命農学研究科の構成員の方から、「図書館といえばここ」、「我々の図書室」という意識を持っていただけているように感じています。その分、期待に応えられるよう、努力は怠れないプレッシャーもあります。日常業務のほか、生命科学分野に関する広報誌や研究科に関する学内会議資料等はなるべくチェックしようと思っていますし、学内外で開催される業務に関する研修や勉強会へも可能な範囲で参加するように心がけています。

何より、利用者との距離が近いことは、分野の専門家である利用者から直接必要な知識を学びとれる機会の増加に繋がっています。今回書かせていただいた内容に絡んだ例ですと、当室に配属された当初、筆者は図書選定と受入を担当していたこともあり、「教員著作コーナー」の蔵書をよく参照していました。そこから、研究科に関する情報収集ができましたし、ご寄贈のついでに執筆時の裏話をしてくださる先生もいらっしゃいました。また、「文献検索ガイダンス」をきっかけに職員と顔なじみになった学生と話をすると、動物学

系の研究室ではPubMedの方をよく使う、という話を聞いたり、最近の研究のホットピックを教えてくれたり、こちらが新たに知っておくべき・身につけておくべき事項を次々と提示してくれます。実際に教育研究の現場にいる方からの話を直接聞けて、自己研鑽のネタや実際の図書館サービスの内容に生かしていける環境にあることが、部局図書室で勤務していることのありがたさかもしれません。

《参考文献》

- 1) 名古屋大学農学部30年史編纂委員会編. 名古屋大学農学部三十年史. 名古屋大学農学部, 1981, 361p.
- 2) 名古屋大学農学部50年史編纂委員会編. 名古屋大学農学部五十年史. 名古屋大学農学部・名古屋大学大学院生命農学研究科, 2001, 658p.

(たなか・さちえ／

名古屋大学生命農学図書室)

分野をまたぐ図書館員とシステム ティックレビュー執筆支援

河野由香里

1. はじめに

筆者が所属する北海道大学は20ほどの図書館(室)がある。これらをおよそ3年毎に異動するが、分野をまたぐ異動が通例で、文学部→工学部→医学部といった異動もあり得る。各分野に特化したサービスをいかに提供するか、この課題を常に抱えている。

今回医系の話をご依頼いただいたが、筆者の医系経験年数は2021年7月時点で満3年3ヶ月と短い。本稿では在籍した図書室について簡単に触れたのち、医系の複数図書室で行うサービスを紹介する。医系大学の方には物足

りない内容と思われるが、何卒お許しいただきたい。

2. 医系の複数図書室をまたぐ

2018年4月、全分野対象の図書館から歯学部図書室に異動した。蔵書数約4万冊、職員2名の小さな図書室だが、歯科の資料が豊富な分野特化型の図書室だ。主な奉仕対象は歯学部の学部生、歯学院生、教職員、大学病院・歯科の医療従事者である。

2021年4月からは保健科学研究院図書室に在籍している。蔵書数約3.3万冊、職員2名と、こちらも小さな図書室だ。主な奉仕対象は医学部保健学科の学部生、保健科学院生、教職員で、保健学科に専攻が5つあり、看護師・保健師・助産師・診療放射線技師・臨床検査技師・理学療法士・作業療法士を養成している。歯学部と比較するとカバーする分野が広く、学生の進路も様々だ。

3. 人事異動のジレンマ

数年で入れ替わる職員は、研究者から見れば「いつかなくなる人」である。数年以上のスパンで進める研究の話を、我々にしようと思うだろうか? そう感じながらも、歯学部では「顧客を知ること」を目的に、雑談をはじめとしたコミュニケーションを積極的にとった。結果、医局会での講習会等、潜在ニーズを拾った案件を実現したが、お手伝いした文献レビュー等が出版される前に異動となった。

「せっかくいろいろ質問できる人ができたと思ったのに残念です」異動の際、歯学部の教授からいただいた言葉である。なんとも歯痒かったが、後任は自分より優秀な図書館員であり、これからも気軽にご相談いただきたい旨伝え、歯学部を後にした。

4. グループ化でできるようになったこと

2018年4月、本学の部局図書室が6つにグ

ループ化された。これ以降、医系グループ(医学部・保健科学研究所・歯学部・薬学部の図書担当)は連携し、学術情報リテラシー業務等を展開している。現在の状況において人事異動は避けられないが、複数図書室でノウハウを共有し、部局をまたいだサービスを行いやすくなった。次に紹介するサービスは、このスケールメリットを生かしたものである。

5. システマティックレビュー作成支援事業

医系グループでは「文献検索相談・代行サービス」¹⁾の中で、研究者が行うシステマティックレビュー(以下、SR)や、診療ガイドライン(以下、GL)の作成を支援している。これは筆者が医系分野に異動してから、勉強と実作業を含め、最も時間を投入した業務である。

5-1. 図書館員の貢献

医系以外の方には耳馴染みがないかもしれない。SRとはあるトピックに対する既存の研究成果を、網羅的に収集・評価し、一定の結論を出す研究手法である。一定の取り決め(PRISMA等)に従う必要がある等、従来の総説(レビュー)とは異なる点に注意されたい。成果として出版される論文は、エビデンスとしての信頼性が高く、臨床現場で意思決定の判断材料となるGLや、医療政策策定の根拠にも用いられている。²⁾

図書館員が貢献するのは「既存の研究成果を網羅的に収集」の部分である。具体的には文献検索を指し、日本国内でGLを作成する際に参照される「Minds診療ガイドライン作成マニュアル」でも、作成時に行うSRに関わる専門家として「図書館員など医学文献検

Search Strategy 検索式の提案

検索式(抜粋)

#1	(Attention Deficit Disorder with Hyperactivity/drug therapy[MH] OR ADHD[TIAB] OR AD/HD[TIAB] OR AD-HD[TIAB] OR ADDH[TIAB] OR attention def* [TIAB] OR "brain dysfunction" [TIAB])	34810
#2	Withholding Treatment[MH:NoExp] OR Placebo Effect[MH]	14982
#3	(drug*[TIAB] OR Pharmacotherap*[TIAB] OR medication*[TIAB] OR "Central Nervous System Stimulants" [MH] OR stimulant[TIAB] OR "non-stimulant" [TIAB] OR "Adrenergic alpha-Agonists" [MH] OR "alpha adrenergic agonist" [TIAB] OR "alpha adrenergic receptor" [TIAB] OR "Dopamine Uptake Inhibitors" [MH] OR "dopamine reuptake inhibitor" [TIAB] OR "norepinephrine reuptake inhibitor" [TIAB] OR "dopamine releaser" [TIAB] OR "Amphetamine" [MH] OR Amphetamine*[TIAB] OR "Atomoxetine Hydrochloride" [MH] OR atomoxetine[TIAB] OR Clonidine[TW] OR Methylphenidate[MH] OR Methylphenidate[TIAB] OR Dexmethylphenidate[TIAB] OR lisdexamfetamine[TW] OR guanfacine[TW])	1758504
#4	(withdr*[TIAB] OR discontinu*[TIAB] OR abstinence[TIAB] OR avoid*[TIAB] OR ceas*[TIAB] OR cessation*[TIAB] OR remov*[TIAB] OR stop*[TIAB] OR Withhold*[TIAB] OR continu*[TIAB] OR maintenance*[TIAB])	2306248

図1. 検索式の例(抜粋)

川村路代「北海道大学におけるシステマティックレビュー支援：始まりとその先」(2019)³⁾ / CC BY 4.0から抜粋

索専門家」が挙げられている。

本学で開始した経緯は過去の発表³⁾をご覧ください。始まりは一人の教員の「対応してもらえないか」という要望だったことを強調しておきたい。「即応できる人材・スキル」はなかったが、教員や他大学の医学図書館員に指導を仰ぎながらOJTで経験を積み、新任の担当者を日本医学図書館協会の講習に参加させる等して、形作っていったサービスである。筆者にとっても似た経験がない業務であり、携わった当初は新たな世界に足を踏み入れた気持ちであった。

5-2. 実務の流れ

研究者から申し込みがあった後、担当者を最低2名決める。担当は医系グループ図書室に所属する5名（2021年7月現在）で、研究者の所属部局職員が優先されるが、他業務を勘案し柔軟に決めている。

次に、研究者との打ち合わせに向け、テーマに関する知識を取得する。同時並行で検索語や検索式の構成を検討し、予備検索でおよその文献数を把握する等の事前準備を行う。その後研究者と打ち合わせを行い、テーマ概要、使用するデータベース、既知文献、不明点等を確認する。

打ち合わせ後、検索戦略を立案し、検索式の提案・修正を繰り返す。検索式確定後、各データベースで検索を実行し、書誌情報等を文献管理ツール等で渡して、終了となる。この流れに付随し、研究評価指標やハゲタカジャーナル等について質問を受けることも多く、次のサービスに繋がる契機ともなっている。

ここから成果が発表されるまでは期間が開くが、論文の共著・謝辞に担当者名を入れていただく例も増えてきており、筆者も謝辞に入れていただいたことがある。⁴⁾ 図書館員の貢献が、ステークホルダーにもわかる形で表されることは、意義があることと考えている。

今後は、Methods部分の執筆支援をする等、更なる支援に向け取り組んでいる。

5-3. ノウハウの共有

先日第68回国立大学図書館協会総会において、本事業が国立大学図書館協会賞を受賞した。詳細は審査報告⁵⁾をご覧ください。そして、本事業立ち上げ当初から携わる川村が、受賞挨拶の最後で発信した「ノウハウの共有」について触れ、この事業の説明を終えたい。

研究者から「共同研究者の所属図書館では断られてしまった」と伺うことがある。先述の通り、筆者の所属組織は分野をまたぐ異動が通例であり、現在の我々のチームも超ベテランがいるわけではない。そんな我々のチームだが、もし同様のサービスを検討している館があるのなら、これまでの経験を喜んでシェアさせていただきたいと考えている。

6. おわりに

「男子、三日会わずれば刮目して見よ」という言葉がある。医系に来て三日どころか三年経過したが、顧客を刮目させるような進歩を得ただろうか。いつか得ることを掲げ、サービスの受け手と能動的にコミュニケーションを取り、「できることの可能性」にトライし続けよう。その先にはまた、新しい世界が待っていることだろう。

参考文献

- 1) 北海道大学附属図書館. “文献検索相談・代行サービス【医系グループ】”. <https://www.lib.hokudai.ac.jp/med/search/>, (2021-07-16参照).
- 2) 卓興綱, 吉田佳督, 大森豊緑. エビデンスに基づく医療 (EBM) の実践ガイドライン システマティックレビューおよびメタアナリシスのための優先的報告項目 (PRISMA 声明). 情報管理. 2011, 54 (5), p254-266.
- 3) 川村路代. 北海道大学におけるシステム

ティックレビュー支援：始まりとその先. 第15回学術情報ソリューションセミナー 2019 in SAPPORO.

<http://hdl.handle.net/2115/76425>, (2021-07-16参照).

4) Tsujii, N.; Okada, T.; Usami, M. et al. Effect of continuing and discontinuing medications on quality of life after symptomatic remission in attention-deficit/hyperactivity disorder: a systematic review and meta-analysis. *J Clin Psychiatry*. 2020, 81, 19r13015.

5) 国立大学図書館協会. “令和3年度国立大学図書館協会賞審査結果報告(システムティックレビュー作成支援事業)”. https://www.janul.jp/sites/default/files/2021-05/shinsa_2021_1.pdf, (2021-07-16参照).

(この・ゆかり/北海道大学附属図書館)

大学図書館員によるサブジェクトサービスの可能性

佐藤 知生

1) 幻影のサブジェクト・ライブラリアン

本稿のタイトルは、呑海氏が2004年に記した『大学図書館におけるサブジェクト・ライブラリアンの可能性』¹⁾にオマージュを込めつつ翻案を試みたものだ。この中で氏は、サブジェクト・ライブラリアン(以下、SL)の日本における状況について「長年その必要性が説かれてきたにも関わらず、…未だ根付いていないとはいいたい」と評し、人事や養成の観点からその導入の困難さを指摘していた。その後も類似する専門職である Liaison Librarian や Embedded Librarian を含め SL 等の専門職制度の可能性は数々議論されたが、国内で実際に導入された例は殆どない。多くの場でその名が挙がりながら半世紀近く

導入を見送られ続けてきたSLは、さながら数学上の未解決問題のように日本の大学図書館界に横たわっている。何がしかのコペルニクス的転回を要する課題と考えざるを得ない。例えば、「〇〇・ライブラリアン」という職種ではなくその機能に目を向けることを促した星野氏の指摘²⁾に注目してみたい。本を正せば重要なのは主題分野の理解に基づいたサービス機能(サブジェクトサービス)であるため、専門職制度はあくまで方法論のひとつに過ぎないと考えるのは筋の通った見方ではないか。では、いかにSL制度を確立するかという従来の議論から少し離れ、次のような論点からサブジェクトサービスの可能性を探ってみてはどうだろう。

<論点①>求められる主題専門性の水準

<論点②>人事ローテーションの影響

本稿ではこれらの論点を軸にしながら現役の図書館員によるサブジェクトサービスの可能性について検討する。なお、前述の文献¹⁾で広義のSLを「特定の主題分野における選書や蔵書構築、情報リテラシー教育等を行い、研究者や学生とその関連分野を接点として関わりを持つ図書館員」としている点を参考に、本稿でのサブジェクトサービスは「特定の主題分野に関する理解と連携に基づいた選書や蔵書構築、情報リテラシー教育、レファレンス、研究データ管理等のサービス」と捉える。

2) 中国におけるサブジェクトサービスの模索から

SLなどの専門職に関するものと比べると、組織的なサブジェクトサービスに焦点を当てた報告は多くない。しかし、中国において近年この観点からの議論が活発なのは興味深い点である。中国では1998年に清華大学でSLが配置されて以来国内にSL制度の導入が進められたようだが、既存の環境にそのまま移植するだけでは十分に機能しなかったため、

チーム制でのサブジェクトサービスに活路を見出しているようだ³⁾。これまでに、機関や目的に合わせて多様なチームモデルを提案したり、オンラインで機関間のチームを接続したりするなど限られた人的リソースを有効に活用する数々の試みがなされている⁴⁾。中国では欧米のように専門職人材を確保・活用できる土壌がなかったとのことであるが、同様の状況下で足踏みした日本と比べると、能力・人材の欠如に立ち止まらずチームビルディングによってそれを補おうとした点は敬服に値する。

SLを組織化する試みは中国に限ったことではないが、専門性を備えた人材の不足や既存のサービス体系への摩擦をカバーするためにチームビルディングの強化を核にした点は日本における論点①を考察するうえで重要だ。サブジェクトサービスの提供にあたって予め主題分野の学位等を必須としない事例は英国等のSLでもみられ⁵⁾、Liaison Librarian等のように教員との連携に重点を置いてサブジェクトサービスを提供するライブラリアンにもあてはまる。担当者らにどこまでの専門性を求めるかは組織のミッション・ステートメントにもよるが¹⁾、これらの事例を見るに予め十分な主題専門性が無ければサブジェクトサービスが担えないという判断は早計のように思える。

3) 人事制度とのコンフリクト

日本におけるSLの導入・養成についての議論では、必ずと言っていいほど論点②の問題が指摘され、ほとんどの場合解決策が提案されていない。ジェネラリスト養成指向の人事制度によって専門性が育ちにくいことは他の技能（目録、システム等）についても言えることであるが、サブジェクトサービスについては研究者との継続的な協力・信頼関係によるリエゾン機能や図書館業界からの情報の収集・蓄積が必須であり、人事ローテーシ

ョンとは最も相性が悪いといえよう。専門性を求める文脈で否定的に語られがちな現行の人事制度にも一定の妥当性があることは認めるが、サブジェクトサービスに限っては担当者が継続して同じ主題分野に関わり続けることが不可欠と考える。これは論点①とも関係しており、バックグラウンドとしての主題専門性の不在をカバーするうえでも必要な条件である。

4) 複層レイヤーによるハイブリット体制への展望

ここで、現行の人事制度とも折り合いのつく案をひとつ提示してみたい。そもそも、なぜ職掌のレイヤーを単層で考える必要があるのだろうか。従来の人事ローテーションはそのままとして、そこに異動のないバーチャルな職掌を別のレイヤーとして設定する体制も考えられなくはない。現に配属部署を横断したワーキンググループ（以下、WG）というレイヤーは多くの機関で取り入れられている。WGはプロジェクトベースで設置され、配属部署に依存しない（関係性を持たせる場合もある）。同様に主題ベースのレイヤーとしてサブジェクトグループ（以下、SG）を追加すれば、部署を異動しても特定主題に関わり続けることは可能だ。業務量の増加を懸念する声もあるかもしれないが、サブジェクトサービスに該当する業務を従来の部署からSGに移行するので全体の業務量は調整できるだろう。

半世紀前であれば夢物語だったかもしれないが、今はオンラインのコミュニケーションツールで遠隔でも研究者と連携することは容易だ。また、サブジェクトサービスはオンライン上で提供可能なものが多く（情報リテラシー教育、レファレンス、研究データ管理等）、閲覧業務、施設の保守運営、受入整理業務といったその他のサービスと比べても部署から切り離しやすいと考えられる。オンライン

ベースのサービスであれば、他機関のSGとの連携も比較的容易なため、ニーズに対して機関内のみで十分なリソースを確保できない場合に機関間協力によって補完できる余地があることは先に述べた中国からの報告³⁾でも触れられている。

5) 専門分野への寄り添い方

例として具体的な青写真を描いてみたが、より適切な体制は機関の種類や規模によって異なる。海外で普及した専門職としてのSL制度も確かに魅力的な選択肢であるが、あくまで選択肢のひとつでしかない。なにより大切なのはギャップ分析に基づいて、理想と現実を埋める建設的な在り方を考えていくことだろう。今後もサブジェクトサービスの議論が続くことを願うが、管理者レベルの方々にはそろそろ具体的なアプローチも期待したい。

なお本稿ではページの都合上、SLをめぐる背景や国内での導入例、医学・薬学分野での優れた取り組み等取り上げられなかった話が多くある。邦文では、既出の呑海氏によるもの¹⁾の他山田氏の文献⁶⁾で詳しくまとめられているため合わせて参照いただきたい。

1) 呑海沙織. (2004). 大学図書館におけるサブジェクト・ライブラリアンの可能性. 情報の科学と技術, 54 (4), 190-197.

2) 星野雅英. (2007). 国立大学における図書館職員の専門性とキャリアパスを考える - 東京大学附属図書館を事例として. 大学図書館研究, 81, 42-52.

3) 樊俊豪 & 陆铭. (2013). 学科馆员团队构建研究. 新世纪图书馆, 2013 (11), 37-39, 86. [Junhao, F., & Ming, L. (2013). Study on the Construction of Subject Librarian Team. New Century Library, 2013 (11), 37-39, 86.]

4) Hao, H., Wang, Y., Li, N., & Yang, J.

(2016, August). A Study of Subject Service in Chinese Academic Libraries. In 2016 International Conference on Economics, Social Science, Arts, Education and Management Engineering. Atlantis Press.

5) Humpreys, K. (1967). The subject specialist in national and university libraries. Libri, 17, 29.

6) 山田かおり. (2014). アメリカの大学図書館におけるサブジェクトライブラリアン. Library and information science, (71), 27-50.

(さとう・ともき／

神戸大学自然科学系図書館)

150 大学の図書館 40巻9号 No.574

大学の図書館 第40巻第9号 (No.574) 2021年9月25日 (毎月25日発行) ISSN: 0286-6854

編集・発行: 大学図書館研究会 年間予約購読料: 送料共5,000円

□大学図書館研究会出版部 (出版物購入・問い合わせ窓口)

〒195-8585 東京都町田市金井ヶ丘5-1-1 和光大学図書・情報館気付

Fax: (044) 989-2250 E-mail: shuppan@daitoken.com

<出版物購入代金等振込先> ゆうちょ銀行 振替口座: 00140-6-482205 大学図書館研究会出版部

三菱UFJ銀行 越谷駅前支店 普通口座: 1403054 大学図書館研究会出版部

□大学図書館研究会事務局

〒305-8550 茨城県つくば市春日1-2 筑波大学図書館情報メディア系 呑海研究室気付

E-mail: dtk_office@daitoken.com

<会費振込先> ゆうちょ銀行 振替口座: 00190-2-79769 大学図書館問題研究会

新規会員募集について

大学図書館研究会事務局組織担当

日頃より組織運営にご理解、ご協力を頂きましてありがとうございます。
さて当研究会では図書館にご関心があるより多くの方に、知見を広げる機会をお持ち頂くだけでなく、ご自身の知見も共有し、様々な活動と一緒に頂くために、新規会員を募集しております。
会員の方には、会報「大学の図書館」の購読、全国にある地域グループや研究グループによる様々な例会イベントへの参加、メーリングリスト dtkML を使った情報共有など、有意義な会員特典がございますし、ご自身の関わり方次第でさらに様々な経験をして頂くことが可能です。
図書館関係者の皆さまにおかれましてはぜひ、周りのみなさまへのご周知方についてもご協力を賜りますようお願い申し上げます。
みなさまの身近に、大学図書館の未来を考えたい方、大学図書館の歴史を知りたい方、大学図書館の機能を探求したい方、そして広く大学図書館に興味をお持ちの方がいらっしゃいましたら、大学図書館研究会をご紹介ください。ご入会をぜひお勧めください。

大学図書館研究会 入会案内・入会申込ページ
https://www.daitoken.com/admission_guide/index.html
入会案内パンフレットも掲載されています

会員情報 (ご連絡先住所、メールアドレス、所属など) について変更があった場合は、その都度、組織担当までご連絡をお願いいたします。

会の安定的な運営のため、ご理解ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

【問い合わせ先】

入退会および会員情報について: 事務局組織担当 soshiki@daitoken.com

2021/2022年度会費納入および会員情報確認のお願い

大学図書館研究会事務局会費徴収担当
大学図書館研究会事務局組織担当

大学図書館研究会の会費は、会則第16条に定められているとおり、前納制です。

大学図書館問題研究会則 (抄)

第16条 この会の経費は会費、事業収入および寄付金でまかない、会員は会費として年額5,000円を前納しなければなりません。

(中略)

4 この会の会計年度は7月1日より始まり、翌年6月30日に終わります。

会費納入がお済でない会員各位、会費の納入をお願い申し上げます。
グループご所属の方は、グループ活動費も合わせてお納めください。
また、会費納入のお願いに併せ、「会員名簿情報ご確認のお願い」も同封しております。
変更がない場合でも、必ず回答くださいますよう、お願い申し上げます。
当会の安定的な運営のため、ご協力をお願い申し上げます。

【問い合わせ先】

会費納入について: 事務局会費徴収担当 kaihi@daitoken.com

会員名簿情報ご確認について: 事務局組織担当 soshiki@daitoken.com

両方に関わるもの、あるいは判断がつかないもの: 事務局 dtk_office@daitoken.com